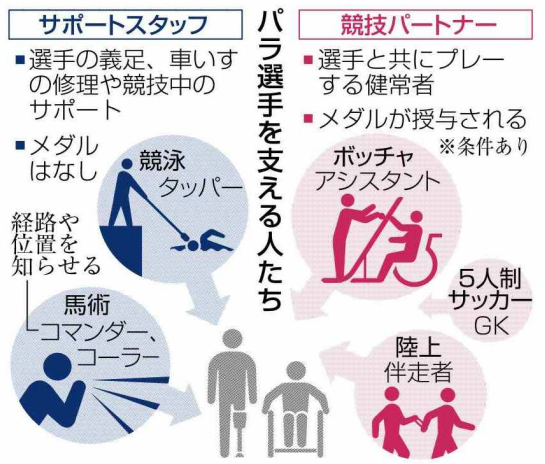
共生の祭典 コロナが影

支える健常者も試行錯誤

パラリンピックには選手の障害を補う健常者の支えがあってこそ成立する競技が多い。選手と一緒にメダルを授与される競技パートナーや、競技エリア付近で重要な役割を担うサポートスタッフは、多様な人々が歩み寄る「共生」を掲げる祭典の象徴だ。選手同様にさまざまな苦難を乗り越え、東京大会に夢と覚悟を持って臨むが、深刻さが増す新型コロナウイルス禍が影を落とす。



感染防止と両立 難しく

開幕1週間前となった17日の結団式に臨んだ日本選手団は、史上最多255選手に競技パートナーやサポートスタッフ、コーチらを加え464人と空前の大所帯となった。陸上やトライアスロンで視覚障害選手を導く伴走者や5人制サッカーのGK、ボートの4人乗りでかじを取るコックスら、選手と共に戦う競技パートナーは、一定条件を満たせば選手と並んで表彰台に立てる。

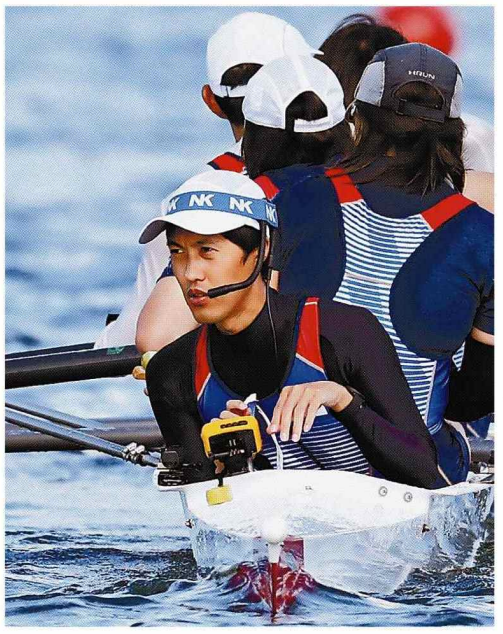
コロナ感染の重症化リスクが高いとされるボッチャで最も障害が重いBC3クラスで、自力で投球できない高橋和樹（フォーバル）を手助けするアシスタントの峠田佑志郎さんは、コロナ禍で一緒に練習できずオンラインでの模擬戦などで戦術を磨いた。「自分たちを信じ、もがきながら調整を続けた」日々を経て迎える本番では、感染防止に細心の注意を払う。

スポットライトこそ当たらないが、声が届く範囲で選手を支えるサポートスタッフも欠かせない。競泳の「タッパー」は、全盲のクラスで泳ぐ選手の頭を棒でたたき、ゴールやターンのタイミングを伝える。呼吸を合わせられるか否かで、順位も左右する。

富田宇宙（日体大大学院）のタッパーは風間みどりさんが務める。練習から時間を共にする必要があり、富田は「僕の頭をぽんぽんたたくためだけに来てくれる。そんなこと五輪にはない」と、パラスポーツ特有のサポートに感謝する。

だが海外では、絆が強いスタッフがコロナ禍で選手団に入れず、選手自身が大会参加を断念する例も。競泳女子で計6個のメダルを獲得しているレベッカ・マイヤーズ（米国）は7月、介助者の母が日本に同行できないため、出場を辞退した。

視覚と聴覚に障害があるマイヤーズはツイッターで「新型コロナの影響で、不可欠ではないスタッフを制限するのは理解できるが、私には信頼できる介助者が必要」と説明。その上で「2021年にもなって、なぜ障害者の権利のために闘わなければいけないのか」と、失望と憤慨をあらわにした。



ボート混合かじ付きフォアでは立田寛之（埼玉・戸田中央総合病院ク、石狩翔陽高出）が日本代表のコックスを務める＝7月、長野県諏訪湖（守屋裕之撮影）

ジャカルタ・アジアパラのボッチャ（BC3クラス）でアシスタントが設置したボールを押し出す高橋和樹＝2018年10月（共同）

アジアパラ競泳男子100㍍背泳ぎ（視覚障害S11）で、ゴール前であることを棒で伝えられる木村敬一（東京ガス）＝2018年10月（共同）